

～旧約聖書を読んで感じること～ (45) ナオミとルツ (2)

イスラエル人は、信仰が異なるという点で他民族と結婚することを強く避けました。他の神々は偶像と見なし、忌むべきものと考えます。それなのに、アブラハムの甥トを先祖とするとはいえ、異教のモアブの女であるルツを、イスラエル人の嫁とし、聖書に最初のヒロインとして登場させ、ルツ記とし、永遠の王と称えられるダビデの曾祖母、そしてイエス様への系譜へと繋いでいることは、驚くべきことであり、重要なメッセージとして受けとめるべきだと思わずにいられません。



ルツ Antonio Cortina Farinós

寡婦になった姑ナオミは、立ち行かなくなったとき、やはり寡婦になっている嫁たちを、実家に帰るように説き伏せました。女性の幸せは子を産むことであった当時を思えば、ナオミの決断は仕方ないものでしょう。けれども、嫁たちが実家に居場所を得られるか、生きていくすべがあるかどうか、困難な課題でもあります。ナオミはベツレヘムに戻って嗣業の土地を処分して、何とか生きていこうと願い、自分一人のことで精一杯だったということでしょう。経済力のない女の生存権は本当に危ういものであることは、時代を超えて明らかです。

ルツがナオミに付いて行ったのは帰る家が無かったのかもしれませんが。また、ルツはエリメレクとナオミの息子の妻となり、この家族の信仰を自分の信仰として受け入れました。ルツは、イスラエルを自分の民と見なしています。

けれどもそれ以上にルツは年老いてしまったナオミを一人で旅立たせることはできないという愛の思いでいっぱいでした。ルツは希望を失い、年老いて力もなくなったナオミの同伴者となり、ナオミを支え、共に歩こうと心に決めました。ルツにとっては苦難の道です。ルツのこの決断、行為は、イエス様のたとえ話、誰が隣人となったか、という「良いサマリヤ人」を思い起こさせます。

人は誰でも、歳を重ねると、気力、体力、知力共に低下し、自己保全が最大の課題となり、自己中心的になるのは、当然かもしれません。そういうナオミの弱さを受け入れ、ルツは、嫁という立場もあったでしょうが、最も身近な、助けを必要とする人に寄り添ったと言えます。忍耐、従順、受容の人として、真珠のように輝く女性だと思わずにいられません。

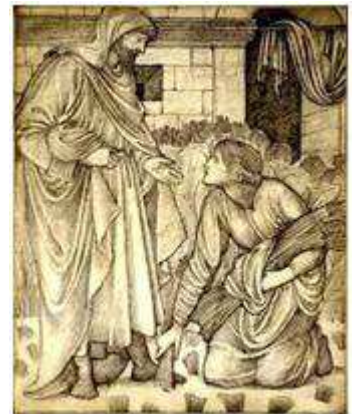
しかしルツも孤独な苦しい闘いを耐えていました。使徒パウロが、

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。(コリント10:13)と述べているようにボアズを備えてくれました。

ルツはボアズの親切を率直に喜び、感謝し、柔らかい心を吐露しています。

「わたしの主よ、どうぞこれからも厚意を示してくださいように。あなたのはしのため一人にも及ばぬこのわたしですのに、心に触れる言葉をかけていただいて、本当に慰められました。」(ルツ2:13)

ルツ記は、異教、異邦の人間が、信仰によって、愛の人となり、神の働きに参与したことを、イスラエルの民に伝えています。権力、財力に頼り、身の安全を第一に考えるのが、人のならいですが、ルツのような愛の決断、行動が神のみ心に適うことなのだと、しみじみと教えられます。



ボアズとルツ E. Burne-Jones